

Book Review 35-6 仕事 #五葉のまつり

『#五葉のまつり』（今村翔吾著）を読んでみた。著者は『火喰鳥 羽州ぼろ鳶組』でデビュー。同作で歴史時代作家クラブ賞・文庫書き下ろし新人賞を受賞。『八本目の槍』で吉川英治文学新人賞、『じんかん』で山田風太郎賞、『羽州ぼろ鳶組』シリーズで吉川英治文庫賞、2022年『塞王の楯』で直木賞を受賞。

本書は時代小説であるが、仕事カテゴリに分類した。歴史の教科書ではただの一言で終わり兼ねない出来事（豊臣秀吉が仕掛けた公私に亘る大事業の裏側）を一事業に100ページ使って語っている。五つの出来事（北野大茶会、刀狩り、太閤検地、瓜畑遊び、醍醐の花見）に、個性豊かな才能を備える五奉行（石田三成、増田長盛、浅野長政、長束正家、前田玄以）。豊臣秀吉に仕える奉行の話であるが、戦闘場面も刀や銃が交わる場面はでてこない。しかし、次の展開や仕事の進捗がどうなるか知りたくなり、ページを捲る手が止まらない。これは『じんかん』や『塞王の楯』を超える傑作である。

豊臣秀吉は裏方の仕事ができる人を取り立て、行政を委ねたという。彼らは五奉行と呼ばれた。本書はこの五奉行を主人公に据え、秀吉が行った五大イベントを、彼らが「どのように仕事をしたか」を克明に叙述する。

本書のタイトルの由来は。自分たちは花ではない。葉である、からとられている。「誰が見ずとも葉は生い茂り、やがてひっそりと身を引き、再び花が咲き誇る」、「人々の笑いを咲かせるため、誰に顧みられずとも働き続ける」と。

北野大茶会

九州平定を終えた秀吉は、京都の朝廷や民衆に自己の権威を示すために、大規模な催事を企てた。そのために茶室を建造し、用いる茶器を考え、呼ぶ茶人を選別しなければならない。その成功を目指して邁進する五奉行と秀吉との軋轢のある千利休との攻防がじくじくと繰り広げられる。果たして千利休は参加に同意するのか。また総勢1,000人を超える参加者をどうやって捌くのか。茶室建造は間に合うのか。茶道具に難癖をつけようと待ち構える利休の追求をどうやってかわすのか。

刀狩り

武士以外の身分から刀や槍などの武具を取り立て、兵農分離を進める目的で行われた政策である。1588年に豊臣秀吉が全国の刀狩令に布告した。

豊臣秀吉の刀狩りは、全国の大名に武器の回収を命じ、百姓を武装解除させることで一揆の発生を抑え、農事に専念させることを目的としていた。この刀狩りの使命を受けたのが、五奉行である。まずは非常に紛糾している九州で行うことになった。五奉行はどうやって武士から刀を取り上げるのか。

太閤検地

豊臣秀吉が天下統一の過程で実施した土地政策で、日本における土地制度の節目となった。

次のようなことが行われました。

- 全国に役人を派遣して土地を調査し、農地の広さや収穫高を把握する
- 長さや面積、米を計る単位を統一する
- 土地の肥え具合や水はけ、平坦さなどの条件を考慮し、土地を4段階にランク分けする
- 土地の責任者を記した名簿を作成し、その名簿をもとに年貢を納めさせる

これを伊達政宗の支配地で五奉行は行うことにした。

少なく申告して利を得ようとする政宗と正確に測量しようとする五奉行とのだまし合い。ここで五奉行の一人の才能が光る。さあ、どちらに軍配が上がるのか。

大瓜畑遊び

朝鮮出兵の基地である名護屋では、参加諸将の慰労のために、茶会を始め、さまざまなイベントが催されたという。ただ、仮装大会などは、細かな内容の記録までは残っていないらしく、本書の記述は著者の創作が大部分を占めるのだろう。百人以上の参加者のうち一番拍手が大きかった者が褒美を受けることになる。賞金に加えて、好きなことを叶えてもらえるという。もし家康が優勝し朝鮮出兵の撤回を唱えたらどうするのかと五奉行は憂える。そこで家康を落とすための（他の者を一番にするための）策略が開始される。

醍醐の花見

秀吉の最晩年に京都の醍醐寺三宝院裏の山麓において催した花見の宴。秀吉の近親の者や諸大名からその配下約1300人を召し従えた盛大な花見となった。その花見を五奉行が任された。伏見城から醍醐寺までの沿道の警備や、会場に設営された八軒の茶屋の運営などにあたった。伽藍全体に700本の桜を植樹し

た。本書では1回目の花見では秀吉の満足が得られず、3日後に会場設営をガラッと変えて2回目の花見を行ったことになっている。果たしてどんな趣向を凝らしたら秀吉の満足は得られるのか。そして秀吉は満足したのか？

本書は、時代を問わず、仕事とはこうあるべきだという見本を提示している。本書を読めば、仕事に対する自分自身の姿勢を見つめ直す契機となるだろう。